令和四年度　自己評価・学校関係者評価報告書

令和5年　４月
学校法人育英幼稚園

1.本園の教育目標

・幼児期にしかできないさまざまな遊びや活動を通した生活の中で、
　社会のルールを学び、思いやる心や豊かな感性、生きる力・学習の根を育む
・居心地の良い温かな環境の中で、一人ひとりの子どものよいところを認め、伸ばす
・家庭と幼稚園が手を取り合って、一緒に子どものことを考える
・全教員が全園児と関わる

2.令和四年度　重点項目・教育課程→別紙参照（年間教育課程）

3.評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	評価	取り組み状況
1	教育課程 環境の充実	A	・各学年の発達に基づき五領域に沿った教育課程を作成、 保育に反映させた。 ・保育者は教育的配慮をもって物的環境を構成している ・人的環境として子どもが全ての活動に主体的に 取り組めるよう一人ひとりに応じた援助を行っている ・月ごとのカリキュラム作成においても職員間で話し合い、 活動におけるねらい、目的を確認し例年にとらわれることなく 新たな活動も取り入れた
2	教育内容 方法の充実	A	・今年度も引き続き、十分な感染対策を講じながら保育を行った。 戸外では暑い時期に熱中症予防としてマスクの管理を行いながら水分補給に努め 尚且つ子どもたちが思い切り体を動かし、 自主的に好きな遊びを楽しむ環境を守り整備した。 ・運動会、遠足、音楽会、発表会などの大きな行事はその時々の 感染者数をふまえ、観覧できる保護者の人数を都度増減しながら遂行した。
3	教師の役割 資質向上	A	・毎日保育後に職員会議を行い、クラスの子どもたちの成長、課題、 今後の留意点を報告、相談し今後につなげた。全職員が全園児への共通理解を 深めることによって子どもへの対応に相違がないよう努めることができた。 ・ZOOMによる研修会にも積極的に参加するなどそれぞれが自己研鑽に努め 内容について報告し合い教職員間で情報の共有に努めた。 ・夏には教員間で小グループに分かれ、それぞれ現時点での保育課題や 深めたい遊びについてテーマを出し合い、園内研修を行った。今後も自ら 学ぶ機会を持ち、得た情報を教職員間で共有した上で日々の保育に活かす 必要性がある。

4	家庭との連携 子育て支援	B	・降園時に、子どもたちのその日の様子を一言保護者へ伝えることで家庭との 連携を深め信頼関係の構築につなげていった。 ・日常保育における活動の様子を保護者へお知らせするため 幼稚園ホームページの更新を随時行い、情報の発信に努めた。 ・預かり保育においても感染の状況を見極めながら可能な限り行い 支援の必要な家庭に協力する機会を設けた。
5	安全、衛生 危機管理の 充実	A	・全園児に健康カードを配布し、検温、体調の変化などを登園時に確認し 感染防止に努めた。また保護者が園内に入る場合は手指の消毒の協力を仰いだ。 ・今年度も充実した保育に取り組むとともに、子どもたちへの手洗いの習慣化、 昼食時での黙食、パーテーションを活用し感染対策を行いながらの活動、 消毒の徹底など職員間で十分に共通意識を持ち対策を行ってきた。 ・子どもたちのマスク着用は任意としながら、各家庭の協力もあり おおむね着用し管理ができ園内でのクラスター防止へとつながった。

評価（A…十分に成果があった　　B…成果があった　C…少し成果があった　D…成果がなかった）

4.総合的な評価結果

評価	理由
A	５つの評価項目について重点的に取り組んだ結果、物的環境、人的環境ともに十分に 配慮された保育内容となった。 本園カリキュラムの二つの大きな柱である「自発的な遊び」と「みんなで共有する活動」を基本とし 一人ひとりの子どもを大切にした質の高い教育を実践することができた。

評価（A…十分に成果があった　　B…成果があった　C…少し成果があった　D…成果がなかった）

5.取り組む課題

	課題	具体的な取り組み方法
1	ICT化の推進	保護者へ向けたドキュメンテーションや子育て支援事業（未就園児クラス活動）などの 申し込みのICT化や、連絡用アプリなどを活用し、情報提供の利便性を図る
2	安全管理	昨今増大する自然災害、緊急事態発生に備えて、危機管理を教職員間で共通理解し 意識の向上に取り組む

6.学校関係者の評価

育英幼稚園の学校評価における第三者評価

松蔭大学コミュニケーション文化学部子ども学科教授・学生相談室長　深谷野亜

1.自己評価項目の設定ならびに取り組み状況について
・評価項目の達成状況については、各項目について丁寧に取り組み、達成されている。
・新型コロナ感染症や熱中症など、子どもの健康を考えた目標を設定し、実践している。
・教員の資質向上に園全体で取り組んでいる。外部研修等で得た情報は、個人に留めることなく園全体で共有し、それを実践に活かすようにしている。

2.教育内容・方法について
・教育活動については、あらかじめ目標を設定し、実践・評価・改善という循環（PDCAサイクル）に基づき、今実践している教育活動を、よりよいものに改善するという意識をもって教育に取り組んでいる。
・長年実践されている、園独自のソーシャルスキルプログラムとして「わの時間」が設けられていることは評価できる。育英幼稚園の教育実践の核となる時間であり、以下の二点の効果が見込めるであろう。
①「わの時間」では、園内で完結されがちな教育を、保護者や外の社会へと教育縁を広げるものであり、子どもがいろいろな人から愛されていると実感できる環境の中で育つことにつながる取り組みである。この試みは、日本社会では損なわれやすい「自己肯定感」を育むことにつながることが期待される。
②園の教育理念である「個性尊重」は、社会との協調とのバランスの育成が重要である。「わの時間」では、子ども自身が、自分の活動の意味を理解し、それをどう考えるかを自分の言葉で表現することを求めている。こうした自分の客観視と「社会の中での自分」を理解することで、互いを尊重することで成立する「個性尊重」の実現につながることが期待できる。
・子どもの遊びや活動において「自発的な活動」と「共有する活動」のバランスを意識したカリキュラム設定・実践が行われている点は評価できる。

3.家庭との連携
・保護者による「わつなぎの会」が組織され、幼稚園の教育理念が家庭に共有できる場が設けられている。「わつなぎの会」は、保護者が親としての視野を広げる場であるのと同時に、幼稚園自体も保護者から学び、教育改善につながる重要な場でもある。過去には「わつなぎの会」の有志が、オーストラリアの絵本の翻訳を行った実績もあるが、残念なことに、ここ数年、新型コロナウィルス感染症の影響から、「わつなぎの会」の活動が抑えられている面がある。今後、新型コロナウィルス感染症の影響がなかった頃のような活発な活動が期待される。
・、育英幼稚園に向けて用意されたお弁当の用意（希望者のみ）やあずかり保育など、保護者の負担軽減を考えた取り組みが行われている。こうした保護者の負担軽減は、園任せの教育につながるリスクもある。しかし、育英幼稚園では保護者の負担を軽減することでできる保護者のゆとりを、子どもとの濃密な時間につなげるという意識が園と保護者の間で共有がなされている点は評価できる。

4. 保護者アンケート

2022年度に実施された保護者アンケート（実施期間：2023年３月）の結果から、園が設定した目標に対して保護者がどう評価しているかを考察する。

4.1　個性尊重の教育

育英幼稚園は、互いを尊重することで成立する「個性尊重の教育」を根幹としている。図1は、「育英幼稚園は子ども一人一人の個性や発達に応じた対応を心掛けているか」について５択で尋ねたものである。「そう思う」「ややそう思う」を合わせると９８．３％と、ほとんどの保護者に評価されている。

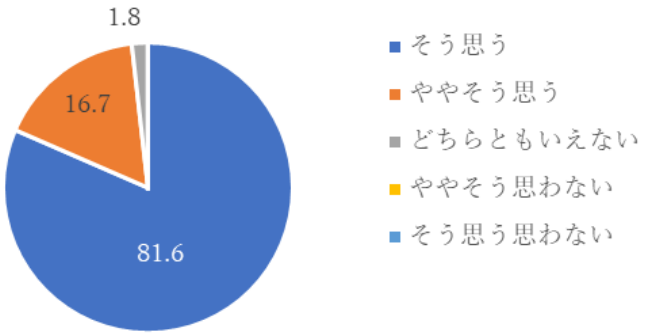

図1.育英幼稚園は、子ども一人一人の個性や発達に応じた対応を心掛けていると思うか（%）。

4.2自然とのかかわり

都会にある幼稚園において、自然と関わり合える環境を整備し、自然とのふれあい体験を幼稚園教育の中に組み込むことは難しい。最寄駅から1分の環境にある育英幼稚園であるが、図2に示されるように、保護者の95.6%が「そう思う」と回答している。園庭の片隅に、ツリーハウスやカブトムシ小屋を設置するなど、子どもが自然環境に興味を持ちやすいような環境整備を心掛けていることが、高評価につながっているのではないだろうか。

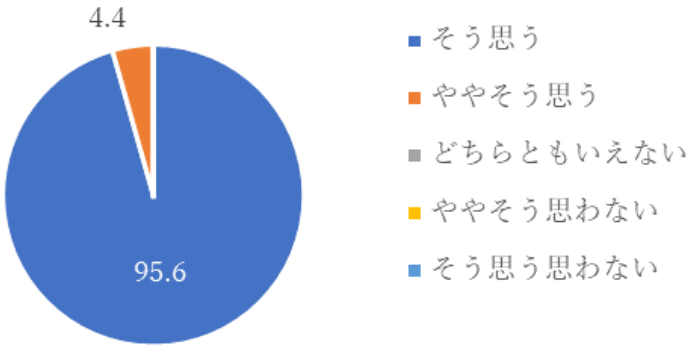

図2.育英幼稚園は、野菜の栽培、虫や植物の触れ合いなどを通して自然とのかかわりを大切にしていると思うか（%）。

4.3　保護者との連携

図3は、「育英幼稚園は、降園時やおたより、ホームページでの伝達・保護者面談などで園でのお子様の様子や活動を伝えようと心がけていると思うか」を5段階尺度で尋ねた結果である。この項目については、「そう思う」が79.8％と、他の項目に比べると保護者からの評価が低くなっている。

育英幼稚園でも降園時の保護者とのコミュニケーションを重視しており、HPでも保護者のみが閲覧できる形で園での活動が公開するなど、保護者との連携を強めようと努力している点は評価できる。しかし、①新型コロナ感染症の影響から対面式コミュニケーションが制限されていること、②保護者との連携を情報ツールを駆使してはかる先端的な他の幼稚園の取り組みなどが、情報として保護者に自由に入ってくる時代である。そのため、育英幼稚園の連携に物足りなさを感じている保護者が一部存在しているようである。

育英幼稚園側の自己評価の「5.取り組む課題」として、ICT化の促進が挙げられている。ICT化は、教育方法や教材開発への影響だけでなく、保護者との連携のあり方を大きく変えうるものである。今後ICTの推進することで、「わの時間」に見られる育英幼稚園の教育理念が更に促進していくことが今後期待される。

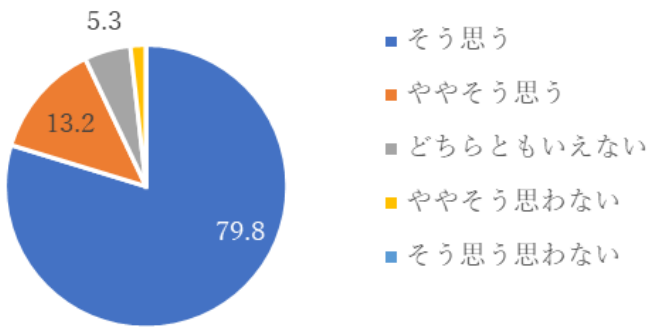

図３　育英幼稚園は、降園時やおたより、ホームページでの伝達・保護者面談などで園でのお子様の様子　　や活動を伝えようと心がけていると思いますか（%）

4.4まとめ

　保護者へのアンケートから、保護者との連携のさらなる促進という課題がうかびあがった。こうした改善点はあるものの、育英幼稚園に対する全般的な満足度は高い。図4は、「育英幼稚園に入園させて良かったと感じているか」の結果であるが、94.7％が「そう思う」、5.3％が「ややそう思う」と回答しており、育英幼稚園に通わせて後悔している保護者が一人もいなかった。育英幼稚園に対する保護者からの高い評価は、今まで育英幼稚園が積み重ねてきた教育を裏付けとしているのではないだろうか。

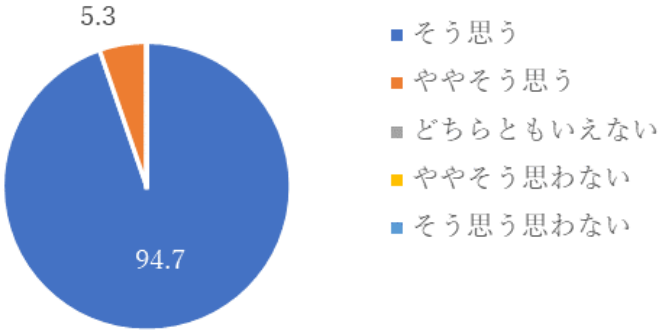

図４　育英幼稚園に入園させて良かったと感じているか（%）

コロナ渦における幼児教育が抱える課題の解決や、幼保一元化の流れの中で幼稚園がどうあるべきか、といった、幼稚園というシステム自体が抱える課題など、今後取り組むべき課題は多い。どんなに素晴らしい教育を行っていたとしても、社会変化に呼応しなければその教育は陳腐なものになってしまう。育英幼稚園を外部から考察した結果、園・教職員・保護者が一丸となって課題に取り組み、子どもにとってよりよい環境整備を目指す素地は整っていることを感じた。今後のさらなる改善や発展に期待をしたい。